

# ミオヤの光

## 信樂の巻

子を愛するミオヤの聖旨……………	一	教祖の人格に現る彌陀光明……………	二二
心の糧……………	二	無碍の光……………	二六
靈活……………	四	愛樂は三昧發得の靈的衝動……………	三六
不思議の謎の解決……………	六	法藏菩薩と示現して……………	三九
心の本と末……………	八	光明靈化……………	四〇
如來光明……………	九	世の救済主……………	四四
安心……………	二		
三心……………	四		
諸佛護念の念珠……………	五		
聖經の友……………	一六		
佛々相念……………	二二		

### 子を愛するミオヤの聖旨

大ミオヤは絶対無限の靈體、光明永しへに照り輝く淨界に在ます。私共は一度無明の闇に迷ひ唯肉の欲に耽り、罪惡の方計りが發達して靈性は具し乍ら毫も顯はれず罪と惱とに墮落して仕舞ふた。

ミオヤは罪と惱とに沈める迷子を殊に憐れみ給ひて救濟の道を示す爲に、法藏菩薩と謙遜り、子をいかにして救はんとの五劫思惟兆載永劫の苦行をも、唯子を愛するミオヤの聖旨より、また十劫正覺の身は、子を愛する慈悲の現はれ、圓滿の相好、無限の光明を放ちて我等を照護し給ふ。攝めて救はんとの聖龍である。

大ミオヤの迷子を憐れむ聖意は、釋迦世尊と身を分けて此世界に出まして、一代五十年、一ら大ミオヤの福音を一切の子等に教へられた。

迷の子等は何にして大ミオヤの光明を獲得することを得られませう。

聖典に、如來の光明は遍なく十方の世界を照して念佛の衆生を攝取して捨給はずと。大ミオヤの慈悲の光は天地に充溢れて普ねく一切の處を照しわたれり。此靈なる光は念佛衆生を攝取すと示され、我らあなたの聖名を稱へ、而してあなたの慈悲の温容を想ひ、あなたの聖旨を得んことを念じて、不斷に止ざる時は、あなたの子を憶ふ愛念と、こなたのミオヤを愛慕する憶念とが、神秘的に融合して、最も親密なる感應によりて、大なるミオヤの靈光に同化せられて、此の汚れたる罪はあなたの聖なる聖旨に清められ、私どもの邪惡の心は、あなたの正善なる聖旨に靈化せられるのである。

### 心の糧

肉體にても赤子が分娩せられて呱呱の初聲を擧げし時には、未だ慈愛の母の温容を見分ることはできぬ。なれども生理衝動より自から聲を揚げて鳴く。さうすると母の慈悲の乳房は赤子の口に含めらるゝ。乳を吞めば育まるゝに随つて漸く母の容をも見ゆるように成る。

私共が心靈も如來が全く靈のミオヤであると自信した時が恰も靈の子が生れたのでナムアミダ佛と稱名が眞に發するのが靈の初聲である。然し初め聖名は稱ふれ共、未だ慈悲圓滿の靈なる光明の靈顔を拜むことは出来ぬ。未だ靈の眼は開けぬからである。そこで靈の乳なる聖龍の光をば私共の信念の心にうけることが不斷にして止まざる時は、靈の子は益々發育して大靈の現れる慈悲の温容を瞻むことが得るやうになる。またミオヤの暖温なる慈悲の聖懷に安仕しつゝあることも信認せらるゝことになる。

如來より平生に與へらるゝ靈の食を、法喜と禪悅と申します。法喜また佛法味とも云ふて、私共の心靈は天地に充滿る暖温なる靈氣のこめたる中に靈の華開きて、常聲の春は長閑に麗らかなる氣分の心の生活ができるのであります。禪悅とは禪三昧の食と云て、一心念佛三昧の中に無我の境に入り、如來の靈光と自己の心と神秘的に融合

して得も言はれぬ悦樂を感ずることである。

法喜と云は、靈的氣分の平生に、自から悦樂を感ずらるゝことにて、禪悦とは神秘融合の靈的的心情である。何れも心靈を養ふ處の糧にて、此等の靈の糧がなくては靈的活氣の眞の生命ある信仰ではない。また恁る悦樂微妙の妙味を以て養はるる精神生活にあらざれば、何如に日々卓上の滋味に口腹を充すも、靈に飢え聖に渴して終身肉の奴隸たること免れ難い。

諸君よ、(聖圖に表しある如く) 自己の靈は如何なる聖途によりて靈育されつゝ、あるやを顧み、日に三度の食よりは、尙靈の糧の貴重なることを信じて、靈き生活をなし現世を通じて永遠の靈的生命靈活せられんことを希ふので、(諸君の一顧を望ましく此圖をすゝむるのであります。)

### 靈 活

人が肉的我のみ活動して、靈の我復活するに至らざれば、活ける信仰と云ふに足らず。恁る人は假令活ける靈界の實驗を録したる聖典を披しても、唯教権の文字ばかり讀みて眞を體得することは不可能である。

苟くも淨土の聖典中に示せる靈界の消息を窺はんと欲せば、其經文を披くに日光や燈火で肉眼的に讀んだ計りでは、其中に秘せる眞理は了解できぬ。然らば日光や燈光によらず、恁麼の光を以て見ることをうべきと問ふならむ。そは他にあらず、人の心靈を照す彌陀の光明である。彌陀の光明を燈火とし心眼を以て讀み得ば、文々句々悉く靈活せる金文たるを悟らむ。

最も要なる自己の精神が光明によりて復活すべきである。靈的生命に入るのである。光化する靈化するにあり。赤眼鏡を以て見れば萬物悉く赤色のみである。一水四見の例である。犬猫の眼には文明の美術も無ければ、野蠻の(一)もない。猫の魂に猫の眼を以て猫の世界を見るのみ。生れたまゝ人間の業識に人間の眼では、いかに聖

人實驗の境を示したる聖典を讀むとも、文々句々唯人間の文字である。文字を通じて靈界を實驗する事は不可能である。人間の魂は業障目鏡を通して見れば、淨土の莊嚴も、莊子の寓言に過ぎぬ。けれども若し人間の業障の非なるを自覺し如来の光明の中に入つて、己が靈魂を根本的に改革して復活して、靈眼開きて視よ、文々句々を通じて眞實世界の莊嚴は宛然として眼前に現せむ。

### 不思議の謎の解決

宇宙は實に不思議である。宇宙は實際後際の有邊か無邊か、空間的に東西南北の界限あるか否か、宇宙は終局目的あるか否か、人生の歸趣する處、生も不思議、死も不思議、不生不滅は更に不思議、萬法不思議である。

實に宇宙は不思議である、抑も宇宙其物が不思議の本體である。宇宙の大なる物は一切生物の大親である。大親の甚深秘密の理は不可解である。宇宙の大なる親の謎は一切の子等の知慧では解決はできぬ。

人生の歸趣する處那邊ぞ、宇宙には邊際あるか無きか、時間的にも實際後際あるか無きか、實に不可解である。人は全體何れより生れ來りて、死して何れに趣くべき。世界七不思議杯と云ふことも實には一切の事物一として不思議ならざるはない。一切の現象が萬物に起伏隱顯生滅變化極りなき。

若し大覺世尊が世に出でまされば、生の源、死の理の歸する處、また善惡の因に苦樂の果あること、また人生の歸趣、三世因果、六道苦樂の世界の本源 進んでは、生死を超えて永生常樂に入るに、一切の人類の不可解なる宇宙の謎は、悉く釋尊の出世に於て解決せられたり。佛陀大自覺の光は常に智見に依て解決せるのみにあらず。進んですべてを光明の生活に入れざるべからざるにあり。

經に、佛語の教誡は甚だ深く甚だ善く、智慧明見にして八方上下古今來今のこと究暢し玉はずと言ふこと無けん、と。

## 心の本と末

八

天地は廣大に宇宙は遼遠なく、然して、天の有ゆる星宿も各々世界とすれば、世界は無數である。其中に生とし活ける物も亦無數である。其有ゆる世界と及び生ける物を、佛教では悉く總括して圖に示せる十法界の中に攝め盡してをる。偕此宇宙の一分子たる我等が形の活きをるのは、無形の精神が存するからである。然れば即ち一切の生物の根元なる宇宙全體に大精神なかるべからず。此大心靈こそ一切萬物の本體なので、萬物は其現象である。大心靈から産出されたる世界及び生物は悉く心を本とす。心が因縁に依りて種々の生物と爲る。之を衆生法と云ふ。斯心に光明をうれば衆生が悟りて佛となる。之を佛法と曰ふ。此心に光なき物迷ひて六凡と爲り、光をうれば悟りて四聖と爲る。故に六凡と四聖とは心を本とす。經に心と衆生と佛とは本來無差別と説き玉へり。心を本とし一切萬法と變現す。實に不思議である。故に妙法と云ふ。我等有形の骸は無形の心ありて生存す。然れば其本源なる宇宙全體は外見物質のみの如くなくとも、内面は大心靈であると云へる。楞嚴經に、此天地に充てる地と水と火と風と空と識との大本は如來藏妙真如性と云ふ。一大心靈なりと説き玉ふてある。此一大心靈に六凡四聖の法界悉く含藏して、夫れから産出されたる宇宙の十法界なれば、一切の衆生の心に各六凡四聖十界の性を具有してをると云ふことになる。一大心靈は親にして一切の衆生心は其子である。

## 如來光明

宗教否佛教の眞理を得んと欲せば他に求むるに及ばず、教祖釋迦如來の心裡に輝ける光明こそ即ち佛教の眞理なり。釋尊曾てシタル太子として王宮に在せる時、人生の老病死の無常の免る、能はざるを見て、いかにして此生死の苦惱の關門を透通することを得べきと。此はシタルが眞理の光明を發見せんとするの動機とはなれり。

九

人は人生無明の裡に没せり。いかにして覺醒して朝日の輝赫々たる中に生活することを得べき。遂に彼は人間の一切の榮耀榮華と上なき幸福を犠牲としたり。

人は生の從來する處、死して趣く處、いまだ自ら覺らざる處、これぞシタル太子が眞理の光明と永遠の生命とを求めたる處なり。王宮を出でて山に入りて學道修行六年、後ついに四十九日大禪定に入りて、菩提樹下に軟艸を敷て坐り靜かに大三昧に入り、臘月八日東の天に明星輝き出づる時に、廓然として無明の夢さめて心の日光は輝けり。

釋尊は此眞理の光明を發見して、肉體の外に心靈に永遠の生命と不老不死の眞理を悟れり、即ち大涅槃なり。

釋尊は眞理の光明を發見し、永恒不變の常樂世界をさとりてより、衆生に教ふるに眞理の光と永恒の生命とを以てす。

永遠の光明によりて永恒の生命をうるは即ち是如來の光明なり。

宇宙眞理の光明は即ちアミタ如來なり、永遠常住の世とは即ち無量光明土、即ち極樂淨土なり。

佛陀なる世尊其徒アナンダに告げ玉ふには、眞理の光なる無量壽佛、宇宙間にすべての權威神力は是如來の有する處、アミタ如來は一切諸佛神明の本地にして唯一獨尊の本尊なり。

## 安心

宗教意識の確定たるを安心と云ふ。即ち絶對的如來に依屬し、其の光明の中に安立せる精神状態なり。

古に云く、所歸、所求、去行を確定せるを安心と云ふ。今此三要理について、安心即ち信仰心のことを解せん。

一、所歸の神尊。人の天自然的の心なる自我主義を排除して偉大なる力を有てる宇宙

一〇

唯一なる絶対的の神尊アミタ如來に歸命信賴し、之によりて救靈を求め、如來を常住の主と仰ぎ無上の恩寵の愛護を被り、神聖なる統治の下に秩序正しく生活し、無限の光明に攝取られ、行住座臥一切の處一切の時として恩寵の聖懷を離るゝことなきを意識し、如來の指導の下に一切の行爲をなし、いさぎよく聖子の天職を果さんとする宗教意識なり。

二、所求。從來の依歸し來りし處の世界は、生滅變易極りなく、苦惱憂悲盡きる事なき處なれば、畢竟の依處、絶對的依歸すべき終局目的として求むべきは、永遠の生命と常住の平和なる如來の大明即ち極樂淨土を以て永恒の安立する處とす。極樂は無爲涅槃界、永く生死を離れ常住安穩の處なり。

さればとて死して後初めて入ると謂ふなかれ。主 我を捨てて如來に歸命したる一念即ち如來大明明中に往生せり。

如來は十方界に周徧し、大光明は宇宙一切處を遍照す。心靈復活し來りて觀すれば、去此不遠、こゝを去らずして即ち如來寂光土なり。已に己身を觀すれば是光明界裡の人なり。永遠の生命と常住の平和は是の如來光明中に於て得らるべし。しかれども有餘の依身はまた世界の規定を免れず。唯須らくこゝは天職を果すべき、即ちこの世界は極樂の豫備の處、方便土として専ら聖旨の實現の爲に力行せよ。歩々向上して念々進趣し、本務勤め盡る時、無餘に歸す。此時に當て實報土現れ來らん。

三、去行(往生すべき行業) 然の意識が感じ居る主 我と生死の世界を出で、如來の光明の裡の人とならんと欲せば、須らく先づ一心に如來の聖寵を表せる、聖名を稱へて、聖旨を得んが爲に、恩寵を獲得せんが爲め、如來の光明に接せん爲に、一心に専ら聖名を稱へ、行住坐臥に捨ることなく、念々相續して斷ることなく、専ら如來を憶念して離れざれば、之を念佛三昧と名づく。衆生佛を念すれば佛も亦衆生を憶念し玉ふ。此 彼の感應水月を叩き、一心到る處に、如來の大明明を發見すべし。此大明明に接する時、無始の無明頓に滅盡し心靈顯現す。ここに於て生死盡て

永恒の生命に復活し、初めて眞佛を見上る時、光明界中の聖者と化す。これを精神の更生と爲す。

已に更生し已ぬれば、是即ち淨土の人なり。常に須らく、神聖なる如來を主とし心情は常に大光明中に安住し、如來の指導の下に在て自己の天職を果すべきなり。

二二 心

至心に深く信す

如來無盡の恩寵より大願をおこし衆生を攝受し玉ふが故に我は至心に歸命信賴し奉る。

至心に深く樂ふ

如來無上の恩寵をもて衆生を愛念し玉ふが故に我らは深く愛慕し奉る。

法身——如來は生命のミオヤ

報身——如來は心靈々化のミオヤ

應身——如來は教のミオヤ

至心に深く欲す

眞善美の靈國に生れて如來の世つぎと成らんことを最終の欲望とす。

諸佛護念の念珠

親玉は十方世界を照して衆生を攝取したまふ大悲の親たる阿彌陀如來。

向玉は彌陀の分身にして斯土に出現して我等に彌陀の慈悲を教へたまふ教主釋迦如來。

その餘の珠は六方恒沙の諸佛各其世界々々に於て彌陀の慈悲を教へて衆生を勸めて歸せしむる諸佛なり。

この彌陀如來を初め奉り、釋迦も十方諸佛も、悉く念佛の衆生を攝取護念した

まふ。  
この信仰に對する衆生を攝取護念したまふことを表示する珠數なるが故に護念の念珠と名づく。

寢てもさめても、唯大慈悲の親たる、彌陀如來を念じ奉り、一心不亂なれば、いつか信心の花開きて、かたじけなきうれしき日がくられれます。

この世はみだの慈光の中に喜ばしき日をくらし、後の世には清らけき安き御國に生れて、觀音ぼさつの如きの方となるなり。

唯ねてもさめても念佛すべし。

### 聖經の友 (あみだ經をよむ友なり)

常に心にかけてこの聖經をよむ人は、このをしへにしたがひて、かの微妙安樂の淨土に生ぜむことを欣求し、彌陀の本願に歸したてまつり、後にはかの淨土にいたり、もろくの上善人と俱に一處に會する友なれば、聖經の友とは名づく。世のなかのあさましき浮れたる友にはあらで、内々こゝろの深き後のかぎりなき時を期しての友なれば、まことの友ぞかし。

こゝかしこ身はへだつともちぎりてし

こゝろは經の國にあそばむ

この世の習ひ、此の身の身は西東と千重の山、百重の雲はへだつとも、この經をよむときに、心はかの淨き美國の御國にあそばおほひ、またたのしきにあらずや。

よむ聲に心もいつかさそはれて

たのしき園にめぐりあそばむ

釋尊の説きたまひし御言葉にみちびかれて、かの極樂の七重の寶の樹のつらなりしはやしのうち、金の池のほとりなどに、徐々として逍遙するの想ひ、あな、たのしきにあらずや。

子をおもふ親のこゝろをしれかしと  
經のたよりにきくのうれしき

子とは六のみにさまよひしわれらなり。親とは淨き御國をかまへてまちわびたまふ、あみだほとけなり。經のたよるとは、釋尊此世に生まれて、彌陀の本願をきかして、すゝめたまふ。若しわれらこれをしらすば、またむなく三塗の火坑に沈むべかりしを、今この御法にあひたてまつりて、淨土にまゐる身となりしことのうれしさ。

この經をよむたび毎におもふかな

ちぎりし友のふかき縁を

この經の教によりて、信を定め、佛の本願に乗じて、淨土をねがふ身は、みな同じ蓮の上の友なれば、この經をよむにつけても、この友をことに思はざるはなしとなり。

よそごとに聞きやしつらんかの國を

わが故郷としらぬむかしは

この經にときたまひし、微妙安樂のさまを聞きながらも、こゝろなきものには、よそごとに聞ゆならん。佛の御意を領解しぬる上は、阿彌陀佛を慈悲の父とし、極樂をもて我本國といふべけれ。されどもまだしらぬむかしはよそのことにき、過しぬらんと。

かざりつゝたれをまつとやおもふらん

親のこゝろを子はしらすして

阿彌陀佛は、法藏因位のむかしより、平等一子のやるせなき御慈悲より、十方淨土にすくれたる極樂世界を莊嚴して、まちわびたまふ、ひとへに我等がためなれども、われらまよひ子は、さともしらすして、むなく六のちまたにさまよふなり。  
ながき夜のねむりもやがてさめぬべし

あかつきごとによむ經の音に  
ながき夜とは、無明の中にうちねむりて、無始よりこのかたさまよひしも、あかつきのねざめのごとくに、まよひのねむりもやがてこの經のをしへによりて、淨土に生れゆきて、大覺朗然として、さとりぬねざめとなるべきなり。

法の緒を心のたまにつらぬきし

はちすの友は戀しかりけり

すゝ玉に緒のほしたるごとく、この彌陀の本願の法の糸を、衆生信心のあなに通して、おなじく一蓮の身になるべき友は、かりそめのこの世ばかりの友とはことなりて、ゆくさきかぎりなく、たのもしくも、戀しくもあるべきにこそ。

きよきあしたしづけき宵によむ聲に

心もにしにすみわたるかな

あさはやくおきて、聲ほがらかによみ、しづかなる宵など、ゆるくと經をよむときは、聲と共にこゝろも西の淨土にすみわたるなり。

### 佛 佛 相 念

「佛と佛と相念じ給ふこと、今佛も諸佛を念じ玉ふこと無きことを得んや、何が故ぞ威神の光々たる乃ち爾るや。」

是文は釋尊が、徒阿難を以て自己の宗教的内容を語らしめたるものとす。意に曰く、我世尊の如來よ、斯の小さき弟子の胸を以て大なる世尊の胸を語らしめよ。私が小さき胸に、或る出來事の爲に、或は悲傷に耐へず或は忿恨に勝へざる時にも、須臾胸を静めて、最も愛敬し奉る處の、慈悲深重なる世尊を憶念し奉る時は、世尊のいと懐しき、慈悲の面影は、彷彿として目前に幻現す。其の靈象に射らるゝ時に、忽ち我胸が融解して、すべての悲しみも、また憤りも、朝日の前の霜の如くに消失し、還つて悦豫と慰安とが遺れり。私が爾る如く、大なる世尊に於せられても、之れと比

すべきことが在せられん。

淨界に在す、大なる如來が在まして、其如來を念じ玉ふときに、私が世尊を念じ上るとき、胸中に無限の靈感ある如く、大海に太陽の光が映寫する如く、淨界の如來を憶念し玉ふ時に、世尊の胸中に、宇宙に響き亘る如きの靈感が在ますならんと想はる。之を佛と佛と念じ玉ふことなきことを得んやと白し上げた。

時に世尊が阿難を譽め玉ひて、阿難よ、汝は能く是の間を發すは實に快し。諸天に教へられて斯く問ひしや、將汝が自己の所見を以て此間を發せし哉と。

阿難は白して言さく、諸天が來りて我に教へたるに非ず、自ら所見を以てかくは問上りのみと。

佛の言く、實に汝が今の間は快よし。能く此間を發せし。いかに此間の價值は無量である。夫が爲に、如何に數多無量の諸天人民を開發し、度脱するか量り難し。此の間にて一切人民の救度は開けぬ。一切衆生、無明闇黒の中に日光は明け渡る。實に如來は無盡の大悲を以て、世に出現し、此の佛の出世に遇ふことは、靈瑞花に遇ふよりも難し、と。

華嚴法華等は大哲人としての釋迦にて、今斯教は大宗教育家としての世尊なり。大宗教育家としての世尊は、宇宙には、盡十方無碍光如來のみ、常恒に存在して、一切衆生を攝取の光明、普く十方世界を照して、斯の光明に攝取せらるゝ者は悉く覺化せられて、開化せらるゝなり。開とは衆生の佛性が開發せらるゝこと、化とは衆生の煩惱が解脫覺化せらるゝことなり。斯の光に遇ふ者は、無明闇黒の凡夫は、永恒に光明の人と更り、罪惡苦惱の衆生が、正善安樂の者と化するなり。

### 教祖の人格に現れたる彌陀の光明

宇宙獨尊の如來の光明は、覺りの眼の開けぬ私共には初の程は直接に瞻むことはできぬ。然れども教祖釋尊の人格に反映せる光明に於て、彌陀の光明を窺ふことが出來

る。顔に、  
例へば西に日は入るも、光は月に映る如と、無量壽王の日光は、牟尼満月に輝やけり。

若し喩へて云はゞ太陽が西の山の端に入りて了へば、此地上は昏くなりて、而も太陽の光を見ることは出来ぬ。されど東の天に昏々として照す満月の光は、何れから来るやと云はゞ、西に入つた日光が映寫して満月の光として輝いて居る如く、私共心の昏き凡夫の眼には、直接に彌陀の尊顔を拜むことはできぬけれども、釋尊と云ふ最も圓滿なる人格の光は、木々淨界にある彌陀の光明から映り來つたのである。無量壽經の序文に明かに現はれてをる斯の御文ほど釋尊が宗教的人格を明かに表現して居るものはない。斯の經文を拜む度に辱なく思ふ。

斯序文に教祖が三相五徳と云ふことを以て、宗教的人格の要素を示されて居る。此れが釋尊が我等衆生の爲に、彌陀の光明を被れば、何人も大小となく皆分に應じて光明の生活に入ることが出来る、光明生活に入れば三相五徳が具はつて来る。釋尊は自ら彌陀の光明を受けて、自己人格の光明を現し給ふ聖意は、彌陀の光明を被むりて人格が新しく生れ更りて三相五徳が具つて來て、初めて光明の生活に入るのである。釋尊が彌陀の法を説くことはすべての人々を光明生活に導く爲である。彌陀の光明を被むれば、斯やうに爲り得らるゝと云ふことを示す爲に、釋尊は彌陀三昧に入り給ふたれば（三昧には心を統一して、釋迦の心は彌陀の光明に入り、彌陀は釋迦の心眼に視え給ふ）一心鏡の如くに明淨なり。釋尊の心に宇宙徧虚空、彌陀光明界となりて彌陀尊、虚空徧滿の本身、相好圓滿にして光明徧ねく十方界を照し給ふ。乃至淨土の無比の莊嚴が現前する其時に、彌陀の大光明が釋尊を照し給へば彌陀の靈徳に反映し、充滿されたる釋尊は、恰も日光に反映する満月の如くの人格と現はれ給ひき。

其の彌陀の靈光の満たされたる釋尊の相を經に示して、  
「爾時に世尊諸根悦豫姿色清淨にして光顔巍々たり」と。

### 無碍の光

さへられぬ光もあるをおしなべて

へだてがほなるあさがすみかな  
此道詠に光明得と未得の人を擧ぐ。初めに吾祖自ら光明を獲得して、眞實に存在するものを自ら宣べ、次に世間一般の人々は光明中にありながら、まだ自覺し實驗せざることをのたまふ。

意は自ら獲得したる光明中にすべての人々を誘引して、自己の内證の境界に攝せんとの意ならん。

吾人は、吾祖の流れを汲む者、吾祖の宗教内容眞髓に倣ふて（救靈）の實を得んと欲す。

吾祖が斯光明によりて、靈的生活したまふが如くに、吾等も生活せん。吾祖が斯光明によりて圓融無碍なりし如くに、吾等も圓融無碍ならんと欲す。初めに道詠に祖師に學びたる吾人の内容を、

吾人が 直観の觀念は是れ如來盡十方無碍光の吾人心現ならずや。此觀念が全く是れ如來大智光明ならずや。斯大智光明を離れて吾人の觀念何れにかあらん。

蘇東坡居士が、如來大圓覺の光明に、一念吾を投する時は、大海に水を投する如く風中に葉を鼓する如くに、吾心と如來心と一體不二、割て割くべき物にあらず。離して離すべき物にあらず。

假令第六天の魔王が來りて、如來心と吾人の心との一體不二を障礙せんとて、百重千重に金剛鐵圍山を以て、其の間を離問せんとしても、逆も不可能の事ならん。是れ觀念中に如來心と衆生心との無碍の心相を言ひあらはしたるなり。

吾人の觀念に對して、吾人一心に念佛して、如來無碍光に吾々を歸投没入したる時

香爐一點の（雲）、忽ち今迄の人間の吾は焼かれて、無碍光中の我と生れ更れり。從來感覺的に見來りし、一室は大火に焼かれて跡なき如くに、無碍光中に觀じ來れば四面に壁なく天井もなく、十方蕩然として邊際なし。無碍光中には山河大地も此光明を碍（）すべき程の物一もあるなし。諸賢自觀し給へ。日光は物を照すに若し障壁あるならば、爲に障られて見ること能はざるも、佛光は心靈界を照す、自ら直觀的に觀じ給へ。無碍に射徹る心光は天井も四邊の壁も敢へて碍へるに足るものなきを。

次に  
如來無碍光と衆生の心情との圓融無碍融合

無碍光は如來一大慈光、いと暖かなる慈悲の靈氣は永しへに、宇宙に充滿せり。春暖の和氣に梅花綻ぶる如くに、慈悲の靈氣除ろに流れて、吾人の信念する所に心靈の花は開かん。一心に念佛して、心の花開く時は、如來の暖なる氣に融して、從前の吾は亡じて、蕩々洋々たる幾億萬里の涯なき（）融合して（）身はこゝにありて神は常に長閑なる樂土に逍遙ふ。如來の慈光と吾心と神秘的に融合し、圓融無碍の不可思議の境に入りて、此の妙樂の遊びを感じ給へ。穢土と淨土と融合し、衆生心と佛心と融合し、彼の淨土の七寶樹、百千の音樂の音は草庵の庭の松風のしらべに相和し、法界の萬有、本來圓融無碍なり。衆生自ら人間の生理に約束せられて、人界的に感覺して自己の經驗を以て眞實とおもふのみ。心靈開きて無碍光裡に神をあそばす時は、娑婆の萬象の中に清淨國靈妙の五塵は無碍に圓かに融合す。

諸賢、吾祖の芳躅に倣ふて自己の吾我の天性の殻を除き去りて、如來より賦せられたる靈性を開きて觀じ給へ。穢土の山河大地は、淨土の瑠璃寶地と融合し、萬物光輝を發して玲瓏なり。譬へば江湖湛然として澄たる夜に、星月皎潔として、水面に影現する如く、日光の水表に赫々たる如く、如來無（）莊嚴淨土の如來は吾人の心裡に輝かん。圓融無碍の境界、何ぞ穢土と淨土と融合せざらん。

また吾人は自己の現在の分齊は天體無涯の中、渺たる一惑星に受けたる一寄生物、

實に淺果なる此身なれども、然れども如來より賦せられたる靈地のあるあり。また如來無碍の靈力によりて法界に充滿せる靈（）と融合すべき資格あることの悦ばしき。

今此の些々たる一身は、圓融無碍、法界重々無盡不可思議の境界と相即相入するの交渉するの靈機なり。

此娑婆と淨土とは、相即相入、圓融無碍の實を得ることは、吾人の心靈によりて現はるれ。吾祖の圓なる頂には、淨穢相即相入し、生佛不二の圓融無碍なるは空想にあらずして、事實たる事疑なし。

是人の感情に於て、如來心光と圓融無碍の光明中に安立する精神状態なり。かゝる事實のあるものを、世人大概は之を識らず、自ら吾我の爲に懸隔をなして五里霧中に生活するの（義）なり。

無碍光の倫理方面

無碍とは自由の義、無碍光に由つて解脱せられたる人の倫理方面を説明せんか。

元來人は如何に道德と衛生上に害をなすに拘らず、不道德不攝生の事を作すやと云ふに、人は根本的に、動物慾は天性に具はり、即ち肉慾我慾の如きは、本能より從來の隋力に益々抗進して、意識的にも之を逞しうせんとするに至れり。天性とまた加はる先天的遺傳の素質あり。後天的に惡習慣の加ふるありて、自己の性癖と習慣とは天性の人には、とても之を矯正すること不可能である。

こゝに於て、如來を一心に念佛して、如來無碍の光明に依りて心靈性開發せられ、意志靈化せらるる時は、靈の光は如來神聖の光より靈我を通じて自己の天性我を照す時は自己の缺點顯然たること譬へば明なる日光の前に自己の汚れが顯然たるごとし。自己の天性自分勝手また性癖惡習悉く自覺せん。しかれども天性我は先天の性癖に縛せられて自ら自己を矯正するの自由なく、自ら惡しと識りつゝも自ら改革する能は



す。或は自分の短慮なる性質にて致方なく、または自分の引込思案は生れつきで止むことなしと、天性の氣質に縛せられて自由のならぬものと自ら断定す。また悪習なる酒煙草朝寝遊惰などの如き、すべて習慣に束縛せられて、自ら道徳と衛生上よくなき事と信せざるに非るも之を自ら脱却するの能なし。

此に於てか如來無碍の心光に融化せられて靈我が顯動的になる時は無碍自在の意志となる。

意志の自由は性癖悪習等が脱却して自ら悪きと感せば自ら制止する自由なり。吾祖の圓滿なる人格悪習の束縛なく實に圓融無碍道徳上の缺點を認むること難かるべし。無碍自在なる無碍光中の生活のほどぞ知られり。

へだてがほなるあさかすみかな

無碍光中にありて何らか之を隔つべきものぞ。論註に如來の光明は無碍なれども、碍は衆生の邊にあり。譬へば日光常に照せども盲者は見ざるが如し。如來常に照せども衆生見ること能はざるは無明煩惱之を覆ふ故なり。衆生の無明は根本的の障なり。次に五蓋等ありて之を覆ふ。傲慢と弊懈怠とは此法信じ難し。

此無碍光によりて靈化せられたる吾祖の道徳的情操を窺はんか、吾祖の人格圓滿なる、無碍光の圓融無碍の實現ならずして何ぞや。

何人にも、物本來の動物慾あり。自分勝手なり利己なり。是道徳的情操の圓融無碍に働くことを妨ぐるものなり。肉慾に縛られ即ち動物慾に縛られ性慾等に縛られ、また浮き世の名利にほだされ、人情に縛られ義理に縛られ、世俗情操としては宗教家としても矢張まだ靈我の區域に入らざれば天性我の俗情にほだされて、自己の大事を外にして不念の事を諍ふに至る。

吾祖に對する南都北嶺の大衆徒等の情操を見よ。俗氣紛々野心擾々臭氣いふべからず。彼等は時勢の潮風に動かされ浮き世の霧に圍まれて、今日聞かへも思はしき振舞を演出するに至りしは哀むべし。其風潮の霧中にひとり超然として暴風吹くとも動

かす百の雷群雲もみ空さやかに照りわたる月には障りあらざりし底の吾祖の道情、悉くす怖ぢす縦令數萬の暴徒共の暴意は吾祖の道情を寸毫も動かすべからず。

浮き世の名譽などに毫も繋がれざる吾祖の圓滿無碍なる道情を見よ。彼の流刑の宣告に對し、また俗氣抜けやらぬ虚偽道心共が浮世の名聞にほだされて、吾祖を諫めたる時吾祖がこれに對へたる道情の度量をおもへば、無碍光裡の情操にあらすして何ぞや。

吾祖が情操道志は、世の罵辱も恥辱も名譽もいかなる器械も破する能はず。解脱無碍の道情にして能すべし。吾祖は全く無碍光裡の人、性質にも縛られず、また悪習に縛られて自由を得ざる形跡だになし。

人は共通的に天性の垢質即ち貪瞋痴等のまた特殊の各自の氣質の垢あるが爲に、束縛せられて自由を得ずして天性の人なり、無碍光中に靈性の人となれば、自己が自己の氣質または悪習等の束縛を解脱して、圓融無碍の人となることを得。

是吾祖の圓融無碍、いかなる周圍の事情にも縛られずして、圓滿なる人格を形成したるを範として、吾人も無碍光の人格を形成せんと欲するものなり。生涯煩惱の細につながら、浮世の束縛肉慾の奴隸となり、(一)債に繋かれ、不羈自在なるべき精神をして、賤しき天性と愛世の(一)に縛られて現在より永遠にいたるは實に憐むべき徒なり。

## 愛樂 靈戀 三昧發得の靈的衝動

三六

我はたゞいつか佛にあふひ草

心のつまにかけぬ日ぞなき

宗教の中心眞髓は精神の感情にあり。絶待の偉大と仰ぐ無比の美神を我有にせんと衝動より發動する情を靈戀と云ふ。即ち靈的憧憬なり。此の動機は信樂なり。如來は實に絶待の偉大なる靈と信じ、また相好端正にして無比なり。また己は淺間敷凡夫なれども、如來はいかなるものも信樂愛慕して止まざれば、必ず慈悲の相好を以て自己に感應交渉し玉ふものと信ず。

宗教の内容には靈的應身と親密なる交渉を得て、生佛感應神人合一せんととの靈的衝動は、是靈的生命ある信仰の必然に物興すべきものなり。

人をして欣慕せしむるの法門は暫く淺近に似たれども、自然悟道の密意は極めて是深奥なりと。宗教の最深邃なるは神人交感の神祕融合の三昧の内容にあり。此神祕融合の密機に於て宗教の中心眞髓たる生命を發得す。此に於て神吾にあり吾は神の有なりと自稱することを得。

是植物に云はゞ春風除ろに流れ來る時櫻花綻びて麗色を早し覆はしきを放ちて造化の妙用を交感せしむると例すべき、神人交感の神祕融合の靈感ありて靈胎を爲して此妙機密によりて靈的生命即ち佛子と爲ることを得。

此神祕融合神人交感は宗教の中心的なれば此靈感を得んとするの心意物興するを靈的衝動また靈戀と云ふ。

法華經に一心に佛を見んと欲して戀念して止まざるの心なり。

今吾祖のいつかあふひ草心のつまに掛けて暫くも忘れんと欲すと雖も忘る、能はざるの靈戀こそ吾祖をして三昧發得して如來を實に吾有とし同棲して不可離の關係を規定せしめたる動機なり。

三七

如來が六十萬億八萬の相好光明端正無比善美を盡して衆生に對するの表情那邊にあるかは知るべし。

孔雀などの類までも其の異性の愛を隱起せんが爲には益々美を發揮す。

況んや一切衆生動物慾に驅られてつひに墮落することを願みざる群萌をして、それが靈性を回復して靈格を爲さしめんが爲には善美を極め盡して、衆生を攝取せんとしたまふ。

靈的愛戀の情まだ發するに至らざるものはまた靈性の成熟期に達せざるものなり。生理上の性慾未成が成熟期に至らざるもの、如し。

孔夫子が賢を賢として色に易へよと云ひしも、賢人を慕ふこと好色を好むが如くせば自己が賢者とならむとの意ならむ。

三八

## 法藏菩薩と示現して

法身とは法性の理體を身とし、形なく色もなく、眞理の妙體即ち精神體にして空間に充わたりて實在せざる處なく時間にも遍滿して存在せざる時なく、形なければ萬物の實體として形も心も悉く此一法身の理體より出ざるものなく、之によつて保存せらる。之の法身が無量の萬物と現じ來れり。之法身なり。

其本體は法身を離れたるに非ざれども、因位無量の願行を以て法身の理にかなふ悟と行によつて、法身を體として知らざる處なく能はざる處なき智と能力とを以て一切衆生を終局に攝取し救靈する性能、此に因と果とは、因とは法藏菩薩と示現して衆生を救ふみを建んが爲に五劫に思を凝し、選擇本願をおこし、兆載永劫に無量の願行を行するを因位と云。二果とは圓滿に開覺して、( )

三九

## 光明の靈化

四〇

聖經に彼佛の光明は無量にして十方の國を照すに障礙する處なき故にあみだと號すと。彌陀の靈光は法身眞理と知と靈能にてましまし、普ねく衆生の精神を照して此心光に觸るゝ者は、眞と善と美とに同化作用ましますなり。

苦惱と罪惡。(無明と苦痛)

人は自から智ありと謂ども其實は無明なり。自ら生の從來する處死の趣向する處を識らす。生死の源を明めもせで、眞深の理趣は悟ること能はず。故に其實は黒闇にあり。

心の苦惱と身體の苦毒は何人も免る能はず。老病死の苦、愛別離苦、怨憎會苦などの苦よりすべての惱は常に捨離することなし。苦に非ずや。人の胸は腹の栖居なり。

されば經に、煩惱の毒蛇睡つて汝が胸にあり。黒蛇の室に在つて眠るが如しと。實に人の胸には罪惡の毒蛇は常に睡つて潜伏し縁に庶れ境に對して忽ちに顯動す。己が情に順へば貪欲を生じ、逆へば忿怒を起し、或は憤怒恨戻し、白が罪を覆藏し、或は嫉み、諂ひ、または害ひ、橋慢、無慚、無愧、遊逸、懶惰、等のすべての罪惡は胸に潜伏して時々頭を出して顯動するは、各自の經驗する處、斯る罪惡の潜伏せる胸室を、罪惡に非ずと辯護する如きは、いよく罪惡の深いのである。

晴れたる月

人は天然の罪惡の皮殻を除き罪と惱との黒き雲をはらふてさやか秋の月を見るやうに、さへざへとたのしく、生活を得るのである。そは自己の力に及ばざる處、こゝに初めて宗教の要を感ずるのである。彌陀のめぐみを仰ぐより外に心のやみと罪と惱みは除くことは出来ぬのである。

佛教とはこの心のやみを照す彌陀の聖光である。一に彌陀を信じ念じて止まざる時

四一

は、罪惡の雲はいつしか晴れて、皎々たる月の如くに、自心が靈化せらるる。佛教及び他の宗教に至るまで何れも罪惡を解脱するなり。

皎々たる月

日は已に西に入りて見えねども、皎々たる月のかげによりて日の光は反映せらる。あみだ佛の光りは遍く照さぬ處なきことは深く信念する心によつて現はる。祖師聖法然は、初め聖道の中に出離の道に心を煩はし、二十餘年の焦慮、甘苦の曉、ついに善導大師の一心專念の文によりて、彌陀の聖意を悟りて、一に彌陀三昧に歸入し、口に聖名を稱へ、意に聖意を念じて捨てず。年久しく功積り、彌陀の聖意に感染し靈化したり。

天然の心は一轉して無明罪惡主我の精神は一轉して聖靈態に靈化し鏡の鏡垢より( )を出し鏡より純金を出したる如く無明罪惡の主我は轉じて彌陀に靈化して、心の内容歴はしと言はんか且つ快よしといはんか鞏固なりと云はん哉、宗祖は已に感染靈化したる處の其述懐として發せられたる聖詠こそ其消息をすぐに洩され玉ひき。

あみだ佛にそむる心のいろにいでは秋の梢のたぐひならましと。

彌陀は無限の光明であり生命である。靈知靈能である。光普くみちわたりてこれに觸るゝものは悉く攝化靈化して神的生命として活動せしむる勢力である。此無限徧在の光明に靈化せられる時は、從來の天然精神の無明罪惡はいつしか轉じて、眞善美と靈化し、恩寵のしぐれにほふごとに、次第に色づきて、秋の梢の、ねてもさめても彌陀のみをおもふに、いつしか感化せられしは、秋のもみちの麗しきことし。

人の心の感覺と感情と知力と意志との四方面に感染し靈化して彌陀は衆生を自己の中に生活せしめたまふ。

感覺は天然は、眼に、耳に、鼻に、舌に、吾が身に、人は眼の慾耳の慾に意を汚し染しむ。

四三

之に對するあなたの光は清淨歡喜智慧不斷の光明なり。

感覺には眼耳鼻舌身の感性清淨になるは、人の感覺は眼の慾、口の味觸等の諸の慾のために精神を染汚す。清淨光によりて玉の磨くが如く成り、六根清淨ならしむ。感情。人は苦毒と罪惡との感情は歡喜の光によりて靈福に充され平和歡喜に充されて平和の生活を得。

知力。智慧光により知力佛知見開示せられて佛の内面深秘の内容を啓示し、聖相と聖意とを悟らしむ。

不斷光。此光にて人の意志世俗野卑情操をさり、神聖正義の靈化の意志として神的活动せしむ。

### 世の救濟主

世の救濟主。彌陀の因位。法藏菩薩は三界六道に迷没流轉する我等衆生の爲に大誓願を立て、救度の使命を叫びて、我れ無量劫に於き、普ねく大施主と爲つて、諸の貧窮を濟すは誓つて正覺を成せしと。

宇宙に唯一の大慈父は六道に彷徨ふ迷子を如何計りか慇に思召玉ふであらう。大施主と爲つて普く諸の貧窮を濟ふとは、何の大施主であらう。如何なる者が貧窮者であらう。私共は大施主の賜物を是非とも戴かなければならぬ者、實に貧しき者であることを自覺し自感して疑はれぬ。貧窮する者とは如何なる者か。先づ二通りに分けて見よう。一に此身體の生活を扶くる物質に乏しき者、言ひ換ふれば衣食住に窮する者。二に心靈の生活を輔くる靈の糧に乏しき者、言ひ換ふれば心靈の衣食住なき者。前の身體を養ふ衣食住に窮せるにもまた程度がある。朝に鷄鳴に起きて重き勞働に苦役し、夜に星を戴きて汗と膏とが盡きて家に至り、辛うじて衣食を給はり、日夜に安きことなき勞役に漸く命を支ふるも窮者である。然れども其等は自ら給濟して自活して居る。尙下りて窮する者は、天なる哉、自業自得なるか、自ら生計の道無く袖乞

をして口腹を輔ひ、橋の下に堂の椽の下に夜を明かし、衣食は辛く身命を支ふるのみ貧窮乞人は底極崩下にして、衣は形を蔽ふことなく、食は趣かに命を支ふるのみ。形こそ人間なれ、倫理已に絶たる者、生れ乍ら乞食なると、又若くして素封家に何不自由なく擲棄されたる者が、中途にして倫落して立ちん坊と成つて、遂に凭の如きの仲間に入るあり。己が意志の薄弱の然らしむるにもせよ、また因果にせよ、實に可感物である。生存中には人間としての衣食住無く死して行倒れと爲つて國人の厄介物として無縁墓地に埋没せらる。其亡靈を慰藉するの香花を手向るもの無く、實に彼等は已に人倫の埒より排除せられたる動物である。然れども佛教の慈悲の眼よりして是を見れば實に感むべき傷むべき滿腔の同情に耐えざるものである。世の同胞に對して彼等は人倫の犠牲と成て活きた教訓を與ふる輩である。凭々に爲せとの先導者なくも人々能く注意して警戒して凭の如き非倫に入る勿れとの戒を示すものである。

爰に慈悲の權化たる河野慈舟大姉は慈悲の眼より、是をよを眼にするに忍びず、世の慈悲心に富みたる同情者の隨喜の涙と共に凝り合ひたる處に成立したのが徳厚會である。逆も現代の如き浮雲の富に（一）なる名譽に懐がる、女流の眼には映する對象でない。慈悲を宗とする佛教を深く信する慈舟大姉の眼ならで誰かは眼が注がるべき此天下に感むべき無縁の亡靈達は、生命五拾年の不幸よりは永遠の淪不に關する幸と不幸との分途を吾等に教訓せられて居る。一开は他でない。先に貧窮に二つ、身體の方とまた心靈の方と云つた。その後者についてである。

心靈に乏しく衣食住なき者は、佛の慈悲の眼より視れば、谷中の無縁墓地に犬のやうに埋葬せられた行倒れよりかは實はもつともつと感むべき者である。五十年の宿なしではない。永遠無窮に神を安んずべき家なき者、心靈を活すべき糧なき者である。無佛論者は、凭の言を聞けば如何に思ひなさるであらう。行倒無縁墓地の行倒れよりは感むべき者とは云ふが凭の如き不幸な者が那邊に居ると怪しむであらう。夫れは貴姉様には御分りになりませぬか。

大夏高堂を棲居とし金殿玉樓の住と寶石の瓔珞に身を飾り、榮耀榮花の爲には金銭を芥塵の如くに費しながら、慈善や功德の爲には半銭尙惜しむやうな貴夫人連中も有り、又劇場や花見遊山には夜を日に紹ぎて飽くことを知らずながらに、教會や宗教の方には一時間だに割くことの出来ぬ輩あり。凭の如きの婦人の精神を解剖して見たならば如何。斯る輩族の精神生活はどんな状態であらう。心靈の糧と聞いたならば如何に思ふであらう。法喜神悅の妙味に得も云はれぬ妙味を味ふて居る時は、心靈自ら潤液豊饒にして歡喜を覺ゆなど、の言を聞かば、何と思ふのであらう。又眞實に佛法に活きた信仰心には、心靈に應法妙服と云ふ最も恰好のよき衣服あり、又心に（）の瓔珞を以て裝飾するから人格が自ら圓滿となりて輝く。忍辱の衣服を着る時はいか成る境合にも動せず。神は大光、明殿中に安住すと云ふ如き、心靈生活の衣食住なくてはならぬ。それとも彼等は形は實に驚く許りの華奢な生活を爲し乍ら、心靈には乞食にも有るまじき生活を爲し乍ら、左りとも自覺せず、心は關より關にさまよふことの傷ましき。さればこそ我大慈父の慈愛やるせなく迷ひ子を惑むのミオヤの情け大施主となり諸の貧苦を濟はずは我も佛に成らじと誓ひ玉へり。心靈の糧は現在より通じて永遠の生命と續くの糧である。

讀者よ貴下は心靈に飢えて居ることはないか。

信仰心には法喜神悅と云ふ類なきえもいはれぬほど美妙な味が心靈に味はうて居なされますか。心靈の糧なくして靈に飢えてゐる人は、山海の珍味を口腹を飽くまで食つても其精神の卑劣なる事は餓道のやうに賤しいのです。

愆の如き心靈に貧しき者、靈の衣食住なき者、若しも愆の靈に乏しき物の爲に大施主と成りて現在を通じて、永遠にまで大施主と爲つて諸の貧苦を濟ひなさるのが即ち大ミオヤの一切の迷子を憐みなさる慈悲である。

然らば私共の大施主なる大御親はいかなる寶を衆生に施與なさるであらう。私共が此施を受けねばならぬ事は次に話します。

昭和二年 七月廿八日印刷  
 同 三十日發行  
 誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)  
 年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨 成  
 發行人  
 東京市小石川區若荷谷町九八  
 印刷人 小林 七太郎

發行所 東京市小石川區水道橋二ノ四四  
 ミオヤのひかり社  
 振替東京六八五一番